

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	基本方針に「利用者一人ひとりが主役」を掲げ、家庭的な生活環境が整う中で自分のペースで過ごせるようにしている
	内容	基本方針の一つに「利用者一人ひとりが主役」を掲げ、職員が利用者別の配慮事項を大切にされた支援に取り組んでいる。家庭的な生活環境が整う中で利用者が自分のペースで穏やかに過ごしている。各個室は利用者の趣味や好みで反映された居心地の良い空間となっており、日中活動支援事業所から帰宅すると自室に直行しホッと一息したり、ベランダに出て外気に触れるなど利用者は自由に過ごしている。食事時間の後にリビングで共に過ごすことも多く、お互いの存在を意識しながら社会性が生まれ、他の利用者の興味に誘われて皆の活動の幅も広がっている。
2	タイトル	権利擁護を事業計画の柱の一つに位置付け、職員への研修、地域啓発活動、ホーム内の支援の実践につなげている
	内容	法人として、事業計画の柱の一つに権利擁護を位置づけ、推進方針と具体的な取組みを明らかにしている。グループホームでは、非常勤を含む全職員に対し「障害特性」「権利擁護」「虐待防止法」に関する内部研修を行うほか、障害理解につながる地域社会への啓発を視野に入れている。各ホームで、利用者特性を踏まえ、生活する上で最小限の決まりを守るようにし、プライバシーへの考え方について皆で共有し安心して暮らせる環境を作っている。個々の価値観や嗜好の違い、生活習慣を尊重し、趣味の継続や部屋の使い方なども話し合い、方向性を定めている。
3	タイトル	グループホームは、障害者福祉を支える法人の地域支援部の核となり、障害者の地域生活の包括的な支援に不可欠な事業を担っている
	内容	森の会は、「共に生きる」を基本理念に、早くから地域に根差し障害者福祉を支えてきた社会福祉法人である。法人で2つの通所施設の運営に従事する中で、利用者の親なき後及び自立支援の要請に対応するため、一早く、平成21年よりグループホーム優朋の運営を行ってきた。法人が現在の新体制となって以降、平成30年にはけやき・かりんの2つのユニットを、核とする多機能型事業所のそばに開設、令和2年には4ユニット目を生活介護事業所に隣接して運営を開始した。生活支援事業オリーブも統合し、障害者の地域生活の包括的支援体制を整備している。
No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	現在の現場対応マニュアルを土台に、職員の振り返りの結果をマニュアルに反映する仕組みを構築したい
	内容	パート職員は、4ユニットの常勤職員のもと、ユニット固定のメンバーと非固定メンバーがあり、基本は、一人勤務のシフト制となっている。このため、現場の精緻な対応マニュアルを整備し、業務を遂行している。マニュアルには、1日の時系列の業務の流れとともに、利用者一人ひとりに対する個別の留意事項も記述している。一方、職員からは利用者への対応を共有する機会が求められユニット会議が予定されている。現在のマニュアルをベースにして、ユニット会議での職員の気づきを整理し、定期的にマニュアルに反映し、経過を残す仕組みを構築したい。
2	タイトル	ユニット会議との分担により、グループホーム全体の会議には、法人の計画と歩調を一致させる役割を期待したい
	内容	市内2地域に分散する4つのユニットからなるグループホームは、全職員を対象にした毎月のグループホーム会議を定例化して、地域支援部としての統括とユニットの自律的な動きを一致させる運営を模索している。今後、各ユニットの会議が定着することにより、会議の役割も整理され、グループホーム会議は、4ユニット全体の組織運営やマネジメントの円滑化の役割が大きくなるものと考えられる。グループホーム全体の会議の検討を経て、ホーム運営の基本や事業計画の策定、その進捗管理など、法人の計画と歩調を一致させる役割を期待したい。
3	タイトル	支援経過記録の内容を整理し、利用者の日々の具体的な様子がアセスメントや個別支援計画の見直しに活用できるようにすることが期待される
	内容	個別支援計画の更新ではモニタリングシートにより目標の達成状況を確認している。日々の利用者の健康状態や生活状況は支援経過記録に記入しているが、行動や会話の中から利用者の姿や気持ちをくみ取り、利用者理解を深め、健康面の確認や、得意なことや不得意なこと、どの部分の支援が必要かをモニタリングにつなぎ、活用するまでには至っていない。支援の質を上げることに繋がる記録の在り方への見直しが期待される。また、計画策定に先立って行うアセスメントは利用者の全体像を把握できるような書式が望ましく、実施方法や回数の検討も期待される。